

タレント

# イモトアヤコ

いもと あやこ

2007年NTV『世界の果てまでイッテQ!』のオーディションに合格。その後、ラジオ、ドラマなど幅広く活動中。エッセイ『棚からつぶ貝』、自身が編集長を務めるWEBマガジン『よかん日和』の書籍化(23年12月、文藝春秋より刊行)などの執筆活動を行っている。



脚本家

# 内館牧子

うちだて まきこ

武蔵野美術大学卒業後、三菱重工業入社。13年半のOL生活を経て、脚本家デビュー。主な作品に、ドラマ『ひらり』『毛利元就』『小さな神たちの祭り』等。文化庁芸術祭優秀賞など多数受賞。最新作は、小説『老害の人』(講談社)。



## ちょっとそこまで 旅してみよう

益田ミリ  
幻冬舎文庫  
506円(税込)

「ちょっとそこまで」の距離って本当に人それぞれだと思う。近所のコンビニの人もいれば、数年前の私は地球の裏側アマゾンすら「ちょっとそこまで」だった。読んでいて半径1キロでも日常が旅気分になるエッセイ。



## 高峰秀子の言葉

斎藤明美  
文春文庫  
803円(税込)

読んでみると、心が時折痛くなるほどの厳しい言葉に打たれる。しかし厳しさの中に圧倒的な愛と包容力があり、これほどまでに響くのは、高峰秀子さんがどれだけ壮絶な世界で生き抜いてきたのか、想像しかできないけど、こうして残して下さってる養女の斎藤さんに感謝である。



## 家事か地獄か

稲垣えみ子  
マガジンハウス  
1,650円(税込)

2023年の文明が発達し、便利に頼りまくっている私からしたら、電化製品を家から無くすという選択は皆無だ。というか無理ゲーな話である。しかし実際遂行されている稲垣さん。読んでいくとだんだんと羨ましくなり、自分にも出来そうな気がしてくるのである。



## ピアノ調律師

M・B・ゴフスタイン  
末盛千枝子 訳  
現代企画室  
1,980円(税込)

少女は将来、ピアノ調律師になりたくて今から努力を続けている。早くも多くの困難が襲い、くじけそうになる。だが、「人生で好きなことを仕事にする以上に幸せなことがあるかい?」と言われ、目がさめた。将来を考える若い人たちに、この言葉はすべてだと思う。



## <死者/生者>論

一傾聴・鎮魂・翻訳—  
鈴木岩弓/磯前順一/  
佐藤弘夫 編  
ペリカン社  
3,520円(税込)

東北大学大学院の鈴木岩弓、佐藤弘夫両教授の授業で、私は初めて「死者」について考えた。本著で磯前順一は書く。「死者には彼らを祀る生者が必要のように、生者には自分たちを支える死者のまなざしが必要なのです」。生者はそれに気づかない。気づくと力が湧く。



## 茶の間の正義

山本夏彦  
中公文庫  
836円(税込)

傑出した編集者であり、不世出の随筆家・山本夏彦。社会や人間の真贋を射ぬく姿勢を、ぜひ若い人に知ってほしい。月面着陸に湧く世界を「何用あって月世界へ」と書いた人だ。この『茶の間の正義』でも、世間で正義とされているものへのうさん臭さに容赦ない。

### message

今や秒で欲しい情報が手に入る日常には、あまりにも早くたくさん、本当かそうでないものが溢れていると思います。怖いのはそれを全て本当にしてしまい、鵜呑みにしてしまうこと。本を読むことは自分の中の本当を見極める作業になる気がします。

### message

父が「若い時から難しい本を読んで、慣れておきなさいよ」とよく言っていた。若いうちに簡単な軽いものばかりで大人になると、もう難しいものに頭がついていけないと言うのだ。父はいいことを教えてくれたと思う。